

～地域みんなで子どもの未来を応援するために～

広がれ、

こども食堂の輪！

活動ガイドブック

地域との
つながり
づくり 編

はじめに

山崎美貴子

東京ボランティア・市民活動センター所長
「広がれ、こども食堂の輪！」推進委員会委員長

こども食堂のつながりづくり

～創生期から模索期へ～

今、全国のあちこちで、こども食堂が誕生しています。「夜遅くコンビニでご飯を買っている子どもを見かけたけれど」「あの子、いつも同じ服を着ているみたい」「夜になっても帰りがらないな」など、子どもの様子に「あれっ」と気がついた人がいて、孤立している子どもを地域で支えようと、自分たちにも「何かできないか」と始まったものばかりです。

気づいた人や気づいた場面がさまざまなので、活動も多様で個性豊かです。運営主体も、一人でできることから始まった活動もあれば、地域の人たちで話し合いながら立ち上がった活動もあります。

気づいた人が自分の思いで活動を始めたという成り立ちの特徴があり、各々が単独で取組んできた傾向が見受けられます。

しかし、一人や仲間だけでは解決できない問題も起きてきました。同じ場所で活動をするためには会場の確保が必要ですし、誰でも来やすいようにと参加費を無料や数百円で設定したいと思えば食材の寄付も必要となってきます。また食を囲むことを通じて、子どもの家庭環境の問題が見えてくることもあります。

相談する窓口などもないなか、「どうしたらいいだろう」と考えた時に、同じ活動をしている人と情報交換をしたり、支援してくれる先はないかと探し始めたりする人が出てきました。「つながること

で知恵が出し合えるのでは」と気がついた人たちが、地域の協力者、専門家、自治体や中間支援組織の職員、企業の人たちとつながりはじめて、問題を解決していくようになりました。また、食を通じた活動としては、すでに高齢者や障害者を対象としたものが多くあり、こうした団体とつながることで多世代交流へと活動の輪を広げているところも出てきました。

一方、子どもたちの様子にも、積極性が見られるようになってきています。食事をしに来ていた子どもが、一緒に配膳をしたり片付けをしたり、食事づくりを覚えたり。また、友だちを誘ったりお母さんを連れてきたりすることもあります。そして、時には自宅で自分やお母さんの分まで食事をつくるなどの成長が見られます。

こうした子どもの主体的な変化が、地域のつながりづくりをさらに広げているのは、大きな成果と言えます。

たくさん誕生したこども食堂が、これからも存続していくためには、現在、試みられているつながりづくりがさらに発展していくことが望めます。居場所と食を通じるなかで、学校、家庭にもよりどころがない子どもたちの様子が見えてきました。そして子どもの活動が行われている現場に専門家や関係者が関わることで、相談窓口として他につなげる機能を果たす、そんなしくみが望めます。

この冊子では、つながりにより解決した事例や、試みられているつながりづくりの事例を掲載しました。こうしたつながりがつくりられているということは、こども食堂が創生期から模索期へと移行していると考えられることもできます。みんなで知恵を出し合うことで、必ず次の段階へ行けると信じています。



つながることの大切さ

室田信一

首都大学東京准教授

つながることの難しさ

今、地域活動ではネットワークやプラットフォームといった言葉を耳にすることが増えています。どちらの言葉も、他の人や団体とつながって、活動を広げていく考え方を説明するものです。一人の力は小さくても、その力が他の力と結びつくことで大きな力になります。地域活動では、そうしてつながることが求められています。

しかし、人とつながることはそれほど簡単ではありません。つながること、つまり、人と一緒に考え、人と行動を共にすること、自分とは違う考えに耳を傾けることや、自分のこだわりに対して柔軟になり、お互いに歩み寄ることが求められます。その歩み寄ることが意外に難しいと感じている人は少なくないのではないのでしょうか。

今の時代、インターネットなどの通信技術を使って、いつでも誰とでも簡単につながることができます。また、サービス産業が発達し、モノやサービスを手軽に得られるようになりました。その結果、個人が孤立することが増えているといわれます。た

例えば、以前は小学生の親同士が顔を合わせる機会や電話で連絡を取り合うということがありましたが、今は SNS などを使って一斉に情報が流れます。便利になりましたが、つながりは希薄になりました。宅配サービスの充実やコンビニエンスストアの普及で、他の人を頼らなくても、個人でニーズを満たせるようになりました。テレビやゲーム機といった娯楽の普及も個人の孤立に拍車をかけています。そうした環境の中では、他の人と一緒に何かをする機会が失われ、他者に歩み寄るという経験が乏しくなっているといえます。

意図的につくるつながり

そのような時代だからこそ、意図的に人がつながる場をつくることが求められます。普段生活しているだけでは知り合うことができない人同士が、知り合い、共に時間を過ごす場が各地にでき始めています。高齢者が集うサロン活動などはその代表例といえるでしょう。孤立している高齢者同士が、実はお互い近くで暮らしているにも関わらず、接点がないので知り合うことがありません。かつては当たり前のようにご近所同士がつながり、井戸端会議をしたり、困った時に頼り合ったりしていました。そうした関係性が自然には成り立たないので、サロンのような居場所をつくり、人のつながりを意図的につくってきているのです。

同様の考え方はこども食堂にも当てはまります。家で一人で過ごすことが多くて、誰かと一緒に時間を過ごしたいと感じていたり、困った時に誰かに頼りたいけど、どのように頼ればいいのかわからなかったり、そのように孤立しがちな子どもたちは少なくありません。そんな子ども

たちの存在に気づくことは簡単ではありませんし、仮に気づいたとしても、個人的に声をかけることははばかれるでしょう。そんな時に、こども食堂という居場所があることで、「こども食堂においで」と声をかけることができます。そうやって子どもの間につながりを意図的につくることができます。

つながりが希薄なのは個人に限りません。地域で活動をしている人や、活動団体自体が孤立しているということがあります。意を決してこども食堂を始めたけれど、実は地域の中に知り合いが少なく、手伝ってくれる人は家族や友人数名で、ボランティアがなかなか増えない、と悩んでいる人がいるかもしれません。SNSで美味しそうなご飯の写真を発信して、ネット上では「いいね!」と言ってもらえるけど、料理の準備から片付けまでほとんど一人でやっていて、だんだん疲れてきた、という人もいます。子どもたちがつながるための場所をつくっているけど、その活動をしている大人がつながっていないということは少なくありません。

だからこそ、ネットワークやプラットフォームという言葉が耳にするようになったのです。地域で活動している団体同士が実は孤立していて、子どもの生活を支えるために協力するということが難しかったりします。そんな時に、誰かが間に入ったり、音頭をとったりして、つながるための場を意図的につくる必要があります。その時に重要なことは、お互いのこだわりを大切にしつつ、歩み寄って話し合う環境を整えることです。高齢者のサロンやこども食堂も、その場を安全な環境に整える第三者がいるからこそ、普段はつながることがなかった人同士が、自分らしさを大切にしながら、安心してその空間で時間を過ごすことができるのです。地域の活動においても同様です。このガイドブックにはそうした実践例が多数掲載されています。

つながることで何が変わるのか

たった4～5年前までは全国に数十ヶ所といわれていたこども食堂が、今や1000ヶ所とも2000ヶ所ともいわれています。こども食堂の活動をしている人にとって全国に何ヶ所あるかということは重要ではないかもしれません。大事なことは、その地域の子どもたちが孤立せずに、安心して暮らしているということでしょう。

しかし、子どもは自分の住む場所を選べません。自分の家の近くにこども食堂がない子どもたちはたくさんいます。自転車で遠方のこども食堂に通う子どもがいるという話も耳にします。こども食堂が一ヶ所あるだけで、その地域の子どもたちにとってどれだけ影響があるかを考えると、同様の環境がもっと増えることでそれだけ多くの子どもたちの笑顔につながることが想像できます。

一つのこども食堂でできることには限界がありますが、他のこども食堂や、地域の関係機関とつながることで、お互いの得意なことを出し合い、足りないところを補い合いながら、最終的には地域全体が子どもにとって居場所になることが望ましいと思います。

そうした実践の一例がこのガイドブックに掲載されています。同様の実践がすでに各地で取組まれていること、そしてさらに広がっていくことを確信しています。

目次

はじめに 山崎美貴子（東京ボランティア・市民活動センター所長） P2

つながることの大切さ 室田信一（首都大学東京准教授） P4

目次 P8

地域資源につなごう P9

1 社会福祉協議会（社協） P10

2 児童館・児童センター P12

3 行政（区役所・市役所） P14

4 学校 P16

5 地域の仲間 P18

コラム 子どもの「あれっ」に気づいたら P20

広がる、つながる、こども食堂の輪 P23

つながりの輪 in 香川 P24

つながりの輪 in 高知 P32

つながりの輪 in 大阪 P40

つながりの輪 in 石川 P48

寄稿「こども食堂」が持つ大きな可能性 P56

天野秀昭（認定NPO法人プレーパークせたがや）

こども食堂を応援してくれる地域資源 P60

おわりに P62

表記について

固有名詞の「子ども食堂」は「子ども」と表記し、一般的には「こども食堂」と表記しました。

地域資源につなごう

こども食堂や居場所づくりを行うには、スタッフ集めや会場さがし、食材や資金調達、子どもへの呼びかけなどが必要です。

ここでは地域資源につながることで、活動を立ち上げたり広げたりした事例をご紹介します。地域資源にはいろいろありますが、その中から5つを選びました。

- 1 社会福祉協議会（社協）
- 2 児童館・児童センター
- 3 行政（区役所・市役所）
- 4 学校
- 5 地域の仲間

中高生の居場所を
つくりたい!

「でもどうやって?」

で飛び込んだ先

社会福祉 協議会 (社協)

- 主な
業務
- 地域福祉活動の
マッチング(人場所など)
 - 資金援助(共同募金など)
 - 広報支援 ●保険紹介

「場所もお金もないけれど、想いはある」 を受けとめてくれた《地域のつなぎ役》

大村みさ子さんは、現在、中高生の居場所「子ども村：中高生ホッとステーション」を運営しています。週1回20人ほどの子どもが食卓を囲むほか、個別に支援が必要な子どもに寄り添った活動をしています。

この活動を始める前から青少年育成活動に関わっており、社会福祉協議会の存在は知っていました。しかし、どんなことをしているところなのかは、よくわかっていなかったそうです。

「場所もお金もない、けれど地域のみんなで子どもの面倒をみるソーシャルファミリーをつくりたい」の一心で、ある日、社協のドアを叩きました。

大村さんの想いをじっくり聞いてくれた社協スタッフの鈴木訪子さんは「地域に必要な活動ですね、一緒に考えましょう」と言ってくれました。

この日から「中高生の居場所」を立ち上げるまでの半年間、打ち合わせを重ねながら、さまざまなことに取り組みました。



荒川 社協

が行った主な支援

- 人の紹介：元民生委員、元青少年委員、教育関係者などに支援を呼びかけてもらったところ10人以上も集まり、その後の中心メンバーになってくれました。
- 会場の紹介：当初、町会や都営住宅の集会所を想定していましたが、「定期的を開催したい」「備品を置いておきたい」などの使い勝手を考えると不向きなことがわかってきました。社協には「この場所を使ってほしい」という情報も集まっており、民間施設でこの活動に適した会場を紹介してもらいました。
- 中学校への挨拶：中学の校長先生とご挨拶する機会をつくっていただき、社協と連携した取り組みであることをお話ししました。
- 支援者の紹介：社協の支援団体(ライオンズクラブ、ロータリークラブ、民生委員児童委員協議会など)とご挨拶する機会をつくっていただき、支援をお願いしました。
- 資金援助：「歳末たすけあい募金」より援助を受け、物品購入などにあてることができました。
- 広報の支援：社協のPR媒体を使って、活動を広報してもらいました。
- 保険の紹介：行事ボランティア保険を紹介してもらいました。

大村さん



鈴木さんが
「いいわね、それでどうなるの?」
と聞いてくれるのが嬉しかったです。
現在も共に歩んでもらっています。

鈴木さん



一団体では解決できない問題も
出てきて、区内の活動をつなげる
ネットワークづくりを、大村さん
たちと一緒につくっています。

社会福祉協議会(社協)とは

「住民主体の理念に基づき、地域の福祉課題の解決に取組み、誰もが安心して暮らすことのできる地域福祉の実現」をめざす活動を行っています。民間団体ですが「社会福祉法」に位置づけられており、各市区町村、政令指定都市、都道府県に設置されています。

子どもにも安心して
参加してもらいたい。

児童館
児童センター

どういう連携が
できるのだろう。

と思って訪ねた先

- 遊びを通した子どもの健全育成
- 子どもの居場所づくり
- 子育て支援
- 子ども参画事業
- ボランティア育成と活動支援
- 配慮を必要とする子どもの対応
- 地域連携の取組み

主な
業務

「子どもにも安心して参加してもらいたい」を応援してくれた 《子どもの遊び・生活相談の身近なエキスパート》

「世代国籍障害に関係なくまぜこぜで、一緒につくって一緒に食べることを通じて楽しみ、無理解から生まれる分断や偏見、孤立を減らし、子どもたちに本物の生きる力を身に付けてもらいたい」。大内巖児さんたちは、そんな願いで「まぜこぜたい《まぜこぜ食堂》」を始めました。

会場も確保でき、チラシも自分たちでつくりました。しかし、子どもたちにどうやって情報を届けたらよいのか、わかりませんでした。そこで、社会福祉協議会に相談に行ったところ、児童センターを運営している NPO を紹介してもらいました。その NPO は、数日

前に偶然出会った、まちのアスレチック遊具でたくさんの子どもの遊ばせていた人が働いている先でした。「まぜこぜ食堂」のチラシを見せた時、偏見などを持たず受け取ってくれた若い職員。児童センターを身近に感じるようになりました。



訪ねてみると、ここを運営している NPO 法人新座子育てネットワーク理事の青砥裕子さんは、全く飾らない態度で接してくれました。

「自分たちも元々は小さな活動だった

けれど、積み重ねてきたことで活動が広がってきました。継続は大事です」。これだけ地域に信頼を得て活動をしている人からそう言われて勇気をもらい、活動をやっていく励みになりました。

●活動の PR: チラシを児童センター内の掲示板上に貼ってくれたり、子どもに「こんなのあるよ」と声かけをしてくれています。

●子どもの状況の情報提供: 大学などと連携して防災イベントを行う際は、「夏休み入ってすぐは、家族で遊びに行く人が多いから集まりが悪い」「1日かけて行う活動の時は、『昼ごはんあり』だと親は助かる」など、よくある子どもの生活パターンなども含めてアドバイスしてくれました。

●ネットワークづくり: NPO 主催の情報交換会で、まぜこぜたいの活動報告をさせてもらうことで、「まぜこぜ食堂」を知ってもらうとともに、関係者とのネットワークづくりのきっかけができました。



青砥さん

新座市福祉の里
児童センター館長
NPO 法人新座子育て
ネットワーク理事

信頼できる人から、
子どもたちに
情報提供して
もらっているのは、
本当にありがたいです。

大内さん

大内さんは、最初から「やっていく」という意思が強く感じられました。子どもに関わり見守る人たちが地域の中に増えて、みんなで子どもの成長を支えていけるといいと思っています。

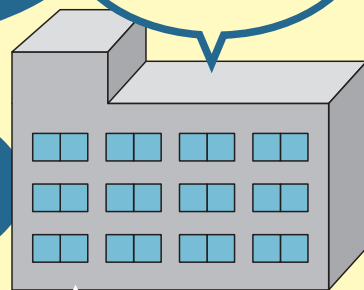
児童館・児童センターとは

18 歳未満のすべての子どもを対象とし、遊びや生活の援助、地域における子育て支援を行い、子どもを心身ともに健やかに育成することを目的とした児童福祉施設です。運営は公営だけでなく民営もあります。施設の規模や機能により、児童館や児童センターなどに呼び名が分かります。

高校を辞めて働きたい
と言うのだけれど。

行政
(区役所・市役所)

勉強しながら
働けないかしら。



- 子育て支援課
- 保育課・児童課
- 教育委員会
- 若者支援課
- 生活就労総合窓口

子ども
関係の
主な部署

行政は《さまざまな制度の窓口》

若者の学習と就労を相談できる窓口があった

子どもが一人でも来られる食堂や学習支援、大人向けの講座など、多彩な活動が展開されている「気まぐれ八百屋だんだん」。この居場所を運営している近藤博子さんのところには、さまざまな相談事が舞い込みます。

小学生の時から「みちくさ寺子屋」という学習支援に通っていた子どもたちが、中学に入ってから「こども食堂」に遊びに来ていました。高校に進学し良かったと思っていたある日、一人の子が「高校を辞めた」と言いだしました。複雑な背景を抱えており、勉強がわからなくなってからの時間も長く、「勉強はもうイヤ、アルバイトを

しながらヘルパーの資格をとりたい」と言うのです。

2年前より近藤さんは、区が主催する福祉計画推進会議の公募委員をしています。その時に知り合った「大田区生活再建・就労サポートセンターJOBOTA(ジョボタ)」の所長を思い出し連絡を取りました。『JOBOTA』



は大田区が設置する相談窓口※¹で、経済的な問題や仕事の紹介など、公的支援も含めて総合的な相談にのってくれます。

※¹ 生活困窮者自立支援法に基づく相談支援機関

この子どもの次のステップはすぐには決まりませんでしたが、子どもの気持ちに寄り添い、JOBOTAと近藤さんが連絡を取りあい見守りながら相談を続けています。

『JOBOTA』でできる支援

- ・就労相談
(就職難、解雇、離職、不安定・雇止め)
- ・就労準備
(生活習慣の確立、パソコン教室等のセミナー)
- ・住居相談
(家賃補助の受付※²、住宅情報の提供)
- ・家計相談
(借金、税金の滞納、減免制度の利用) など

※² 住居確保給付金制度

自治体により、相談窓口の呼び名や、相談の範囲が違いますが、市民が相談できる窓口は必ずあります。受付や、関係部署を訪ねてみましょう。

行政職員と意見交換できる関係づくり

近藤さんは、「こども笑顔ミーティング」という、区内の子どもの活動を行っている関係者が集まる会を、月1回開催しています。この会合に、行政の子ども関係の部署や教育委員会の職員が参加してくれるようになり、さら

に充実した情報交換や意見交換が行われるようになってきたそうです。

このように、さまざまな立場の人が日常的につながることで、いざという時に相談しやすい関係をつくっています。

こんなアプローチも考えられます。行政主催の講座などに参加することも、担当職員と知り合いになるきっかけがつけられます。



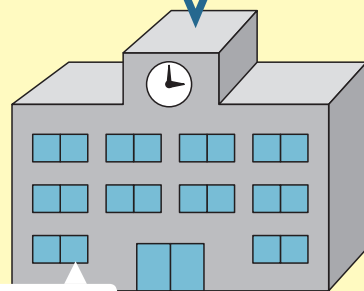
近藤さん

行政の窓口一人で相談に行くのは、ハードルが高いですね。でも、公共の支援や情報は大切なので、相談できる先を見つけて活用してほしいです。

子どもへの対応に
困ってしまった。

どうしたら
いいのだろう。

学校



- 補助教員 ●特別支援学級
- 学校支援ボランティア
- スクールカウンセラー (SC)
- スクールソーシャル
ワーカー (SSW)

子どもを
支援する
主な制度

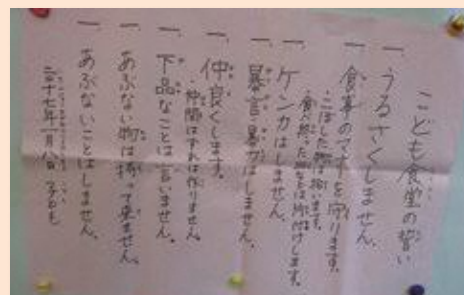
スクールソーシャルワーカーがいてくれて助かった 《学校と地域のつなぎ役》

上野忠昭^{ただあき}さんは、香川県にある地元の小・中学校に所属するSSWの方から子どもたちの深刻な状況について相談を受け、「しうん子ども食堂（26ページ参照）」を立ち上げました。

協力者も増え活動もまわり始めた頃、ある子どものとった行動が地域で問題になってしまいました。SSWの方は子どもたちを集め「この場を継続したいなら、どうしたらいいのか自分たちで考えて欲しい」と投げかけました。子どもたちは意見を出し合い「うるさくしません」「あぶない物は持って来ません」などのルールを考え、「子ども食堂の誓い」としました。これに

降、子どもたちもこのルールを大事にしながら活動が継続されています。

「SSWのような専門家がいなければ、地域だけではとても解決できなかった。子どもに関する専門家とのつながりは大切」と上野さんは感じています。



「SSWのお仕事は？」

「SSWに関わって欲しいと思った時はどうすればいいの？」

SSWとして学校と地域をつなぐ「山田恵子さん」に教えてもらいました。

●SSWのお仕事

- ・子どもを見守るためには、「学校、地域、家庭の連携」が大切です。地域のつなぎ役としては、例えば社会福祉協議会のような中間支援組織がありますが、特に「学校」に関するつなぎ役はSSWが有効だと思います。
- ・SSWは、基本的に学校から依頼を受けて動きますので、学校からの依頼がないと動きにくいことがあります。「学校から地域へ」のアプローチは比較的容易でも、「地域から学校へ」のアプローチは難しいことが多いと感じています。
- ・先生たちが一生懸命頑張って下さっても、異動があります。「地域の人たちは、ここでずっと子どもを支えてくれますから」と学校に伝えることができる立場だと思っています。



●SSWと出会うには

- ・「あれっ、大丈夫かな」と感じる子どもがいたら、その子どもの在籍している学校を訪ねてみてください。「地域と学校をつなげる役割としてSSWがいるそうですが、会ってみたい」と言ってみるから始めると良いと思います。

こんなアプローチも考えられます。

学校と保護者や地域のみなさんがともに知恵を出し合い、学校運営に意見を反映させる「コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）」という仕組みがあります。地域の人にもメンバーに入っていますので、その人を通じて学校とのつながりを探る方法も考えられます。

スクールソーシャルワーカー（SSW）とは

SSWは、問題に直面する子どもを支援する社会福祉の専門家で、各自治体の教育委員会や学校自体に所属しています。専門の資格はありませんが、国家資格である社会福祉士や精神保健福祉士などの資格を持つ人が多いです。

一人で問題を
抱えてはいけない。

地域の仲間

協力してくれる
仲間はどこに
いるのかな。



《同じまちで一緒に暮らしていく》ために 地域で協力してくれる仲間が必要

こども食堂をはじめ、学習支援やプレーパーク、宿泊できる施設の運営、地域の先輩ママが子育てを一緒に行う「ホームスタート」など、切れ目のない支援に取り組んでいる「NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク」。理事長の栗林知絵子さんは、こうした活動を行っていくには「地域での仲間づくりが大切」と言います。

7年前、小学生の頃から知っていた子の高校受験を一人で支援したことが、現在の活動の始まりです。自宅で子どもに勉強を教え、夕食を一緒に食べる日々。大学生ボランティアの協力もあり、毎日の学習は進みました。一人で

抱えきれないと思ったのは、その子どもが塾に通うための融資を受ける保証人になった時です。「仲間が必要。このまちで協力してくれるのは誰だろう」。

数年前に会ったことのある、不登校の子ども居場所づくりをしている天野敬子さんを思い出しました。早速「会いたい」とメールを送りこれまでの想



いを伝えました。天野さんに相談したことがきっかけとなり、地域でのネットワークが広がって行きました。今では地域に住むさまざまな協力者が登録するメーリングリストができ、「ランドセルが必要」「差し上げます」などの情報交換が行われる仲間ができました。

栗林さんと天野さんとは、NPO の理事長と副理事長・事務局長として、同じまちに生き共に活動を支える関係が続いています。

栗林さん(左)と天野さん

「困っている」ことを伝えることが大切。 子どもも大人も同じ。

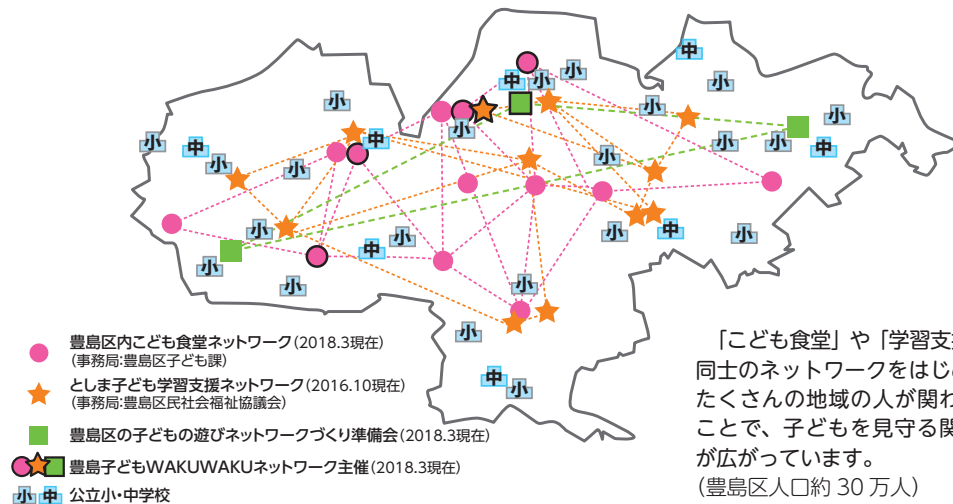
「自分の考えていることに興味を持ってもらい、協力してもらうには、自分の弱いところも含めて、困っていることを伝えることが大切」と栗林さん。

『豊島区子どもの権利に関する条例』には「困ったことがあったら、助けを求めていいのです。あなたは、ひとり

ではありません」とあります。

大人も同じです。困ったことがあったら自分一人で抱えず、話を聞いてくれる人に出会うまで相談することです。何か接点がある人が見つければ、そこから「この人に相談したら」という解決の糸口が見つかっていきます。

豊島区では、子どもを見守るネットワークが広がっています。



「こども食堂」や「学習支援」同士のネットワークをはじめ、たくさんの地域の人が関わることで、子どもを見守る関係が広がっています。
(豊島区人口約 30 万人)

子どもの「あれっ」 に気づいたら

子どもの「あれっ」に気づいた事例

□食べ物を取り方

- ・入り口にお菓子などをおいておき、「目の色を変えてたくさん持っていく」などの取り方に注意して見ておく。
- ・「兄弟の分を持って帰っていいか」などを聞いてくる時は、家庭環境を知るきっかけになる。
- ・食べ物の好き嫌いが激しく、食べられる物は驚くほどの量を食べる。

□スタッフとの関係

- ・スタッフにベタベタくっついてくる。スタッフを独り占めする。
- ・気を許した大人には甘えるが、知らない大人や子ども同士には攻撃的。
- ・信頼関係ができてからは、スタッフの顔を見ると急に泣き出すこともある。
- ・大人の顔色ばかりを見る。

□服装、身なり

- ・いつも同じ服装をしている。
- ・季節にそぐわない服を着ている。

□行動

- ・お昼になっても帰らず、お菓子だけで過ごしている。
- ・小学校の低学年であっても夜になっても帰りたがらない。
- ・物をやたらと壊す。破壊行動が目立つ。

みんなで食事を囲んでおしゃべりをしたり、遊んだり。こうした活動を楽しみに集まってくる子どもたち。けれど色々な困難を抱えている子の中にはいます。子ども自身が、自分が困った状況にあるのかどうか、わからないこともあるでしょう。

子どもが困っている状況かどうかは、まわりの大人が気をつけて発見しているケースが多いようです。今回取材を通しておうかがいした、それなりの工夫や対応をしている事例をここでご紹介させていただきます。

子どもの「あれっ」に気づいたあとの対応

□勉強、宿題をみる

- ・勉強がわからず授業についていけないと学校に行くのがイヤになってしまうので、勉強をみる。
- ・夏休みの宿題は、大人の手伝いがないとできないものもある。宿題が出せないと、二学期から通えなくなってしまう子どももいるので、宿題が出せるように手伝う。

□着替えをさせる工夫

- ・同じ洋服を着ている子どもがいる時には、その子だけに洋服を渡すような特別扱いはせず、バザーを開いてみんなで一緒に分け合う。
- ・汚れた洋服や下着を着替えさせたい時は、どろんこ遊びをしてお風呂に入る、夏はプールで遊ぶなど、遊びと一緒に着替えのチャンスをつくる。

□スタッフ間で共有、次のつなぎ先

- ・気がついたことがあったら、スタッフ間で共有するようにする。
- ・専門機関などのつなぎ先を考えておく。

それぞれの場でさまざまな工夫と、情報共有を試みる姿がありました。けれどこれらをチェックさえすれば大丈夫、ということでもありません。子どもが「困っている」かどうかを嗅ぎ分け、見極めるセンスも現場では大切なようです。これらはあくまで参考にさせていただいて、その場の大人たちと共有して、その子にとってなるべくあたたかな、良い時間が多くなっていく道しるべになればと思います。

掲載団体の情報

子ども村：中高生ホッとステーション

🌐 <http://ftimes-arakawa.tokyo/groups/hottstation/>

社会福祉法人 荒川区社会福祉協議会

東京都荒川区南千住 1-13-20

TEL 03-3802-2794 FAX 03-3802-3831

まぜこぜたい

f まぜこぜたい 検索

新座市福祉の里児童センター

埼玉県新座市新塚 1-4-5 福祉の里 3F

TEL 048-481-6477 FAX 048-481-6145

🌐 https://sites.google.com/a/ccn01.mygbiz.com/niiza_fukushi/

気まぐれ八百屋だんだん

東京都大田区東矢口 1-17-9

🌐 <https://ameblo.jp/kimagureyaoyadandan/>

大田区生活再建・就労サポートセンター

JOBOTA(ジョボタ)

🌐 <https://www.jobota.net>

しうん子ども食堂

P30 参照

スクールソーシャルワーカー

各自治体の教育委員会などにお問い合わせください

NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク

🌐 <http://toshimawakuwaku.com>

広がる、つながる こども食堂の輪

「困ったことがあるのですが、どうしていますか」と相談したり、「その工夫いいですね」とアイデアをもらったり。

こども食堂をはじめ、子どもの活動をしている関係者が集まり、相談や情報交換をする動きが広がっています。

ここでは、地域でつながりづくりを広げている事例をご紹介します。

つながりの輪 in 香川

つながりの輪 in 高知

つながりの輪 in 大阪

つながりの輪 in 石川



つなりの輪 in 香川

「香川おもいやりネットワーク事業」は、社会福祉法人と社会福祉協議会（社協）と民生委員・児童委員がつながり、支援を必要とする方を「地域でトータルにサポートする仕組み」をつくり、「福祉でまちづくり」をめざす事業です。

お遍路さんが巡礼で訪ねるさぬきの国、香川県。

昔から「おせったい」、ホスピタリティの精神が根付いているといいます。支援を必要としている人が、制度のすき間から落ちることのないよう、細やかなネットワークを試みる場を訪ねて来ました。

みんなの食堂 ～琴平社協～

「食」を通じたつながりをつくることで
点が線になって巻き込むチカラに

古くから庶民に信仰されている「こんぴらさん」の入口にあたる琴平町は、金刀比羅宮のある象頭山の麓に広がる観光の町です。社協のある建物は「琴平」の駅のすぐ脇にあります。元保育園だというこの場所で、訪れた日は

高齢者から子どもまで、鉄板で
お好み焼きを焼いていました。

琴平社協の理事で事務局長の越智和子さんは、この地で生まれ、土産物屋や商店が建ち並び、親密な昔ながらのご近所との関係の中で育ちました。否が応でもそこには支え合う関係があったといいます。そんな越智さんが大人になって故郷をみると、高齢化、孤立化が進んでいたそうです。別のカたちでもいいから支え合うカタチをと、社協の設立時に他の職員とともに、介護保険制度が施行される以前から、地域の中で暮らす人たちを「食」を通じてさまざまな形で支援するカタチを模索してきました。元保育園だった社協の建物内で「えんがわクラブ」という会食の場を、この場に足を運ぶことが困難になった人には配食サービスを。商店街の空き店舗を使って「もぐもぐ」というお惣菜を買える場を。店舗の向かいには、買ったお惣菜を食べられる場所もあります。

さらには在宅障害者の社会参加のきっかけの仕事づくりとして企画され、開発された琴平町の特産品ニンニクを使ったガーリックオイル「ガリック娘」。今年年間 6000 本を売り上げるヒット商品になっています。こうした自主財源を得ることで、制度の枠にとらわれない動きを確保できています。

昔のつながりとは違っていても点が線になり新しいつながりになる。新たなつながりのカタチを「こんぴらさん」が見守っているようです。



越智さん



社協が自主財源を持つこと自体も珍しい取り組みですが、このことで JA や観光協会、商工会青年部、婦人部、小中学校、高校といった福祉の枠ではない人や団体とつながることができ、異分野に興味を持ってくれるようになりました。

しうん子ども食堂

お寺の住職とスクールソーシャルワーカーの「思いやり」から生まれたこども食堂

高松市内の四番丁小学校の跡地にある四番丁スクエアにはためく手づくりの「しうん子ども食堂」ののぼり。

お寺の住職であり、地域の活動に明るい上野忠昭さんとスクールソーシャルワーカーである柳田和代さんが出会って生まれた場所です。上野さんはここ四番丁小学校の閉校直前のPTA会長を務め、子どもたちの学習支援も行なっています。柳田さんは中学校にスクールソーシャルワーカーとして入っているうちに、放課後や休日に「行くあてのなさそうな子どもたち」を見るにつけ、居場所の必要性を感じていたそうです。そうした思いからできた「しうん子ども食堂」。

上野さん自身は3人の子どものお父さんでもあります。上野さんは数年前まで「今のこの日本でまさか『社会的に弱い立場の子どもが孤立を抱えている』、という事実が信じられなかった」と言います。この言葉は、今回あちこちで聞いた言葉です。見えにくいSOS。見えにくいから生きづらい親子。誰もわかってくれない理不尽さは、時に家の中で子どもに向かうの



写真
上野さん(右)と
柳田さん(左)



上野さんは、四番丁地区社会福祉協議会会長、および四番丁地区民生委員児童委員協議会会長をつとめ、「しうん子ども食堂」は4つの地区社協が運営主体となり、SSW こどもサポートネット、ボランティアスタッフが協力しています。

かもしれません。

小さな体育館ほどもある「しうん子ども食堂」では走り回ってみたり、ふざけてみたりと子どもがのびのびとしています。ふと見ると調理をしているボランティアの女性たちに「こないださあ・・・」といろいろ話している子もいます。ボランティアさんも時に笑いながら相づちをうち、家での夕食の支度をするお母さんの横で話しかけている子どものようでもあります。

この日のメニューはタンドリーチキンとサラダなど。ボランティアのみなさんがゆるやかに見守って、できあがったら一緒に食べる。いろいろあってもここではあたたかな時間を。そんな想いのこもった「しうん子ども食堂」。

いつか、ここに足を運んだ子が「大人って案外捨てたもんじゃないかも」。そんな風に思ってくれたらと願いつつ、食堂を後にしました。



ヌーベルかんざき

大きな古民家で小さな家族のような時間を

平野と小さな山が点在する讃岐平野。

そんな讃岐の代表的な風景が目の前に広がり、四季折々の彩りを眺められるさぬき市寒川町神前の古民家を改装して多世代の居場所として開いているのが「ヌーベルかんざき」です。

旧農家の居宅をリノベーションして使われているので、広々としています。

納屋であった部屋は多目的ホールや子どもたちの学習室に、いろいろあった部屋はデイサービスに、その隣のスペースはカフェスペースに、と広い室内を上手に分けて使っています。

ここは香川県内で障害者支援施設や介護老人保健施設を運営している「社会福祉法人祐正福祉会」が社会貢献事業の一環として運営するコミュニティスペースです。さぬき市初の地域密着型認知症対応型デイサービスと地域の居場所を混合したものとして2016年11月にオープンしました。この管理者である眞田智子さんの手づくりのスイーツは絶品で目の前の田園風景を眺めながらのカフェタイムは至福のひとつです。



毎週土曜日は「わんぱくサポート」の時間です。市内の寒川地区にある同じ社会福祉法人が運営する介護老人保健施設に集合した子どもたちがバスでやって来ます。校長先生を退職した人が勉強を教えたり、一緒にご飯を食べたり。走り回る子には「走っちゃいかんよ」と、諭す高齢者がいたり。



わらじの編み方を子どもたちに教える時は子どももお年寄りも目がキラキラしています。大きな一軒家が小さな家族になる時間は、施設長である尾崎民子さんが願う「古民家のなかでのあたたかな地域貢献」を着実にものにしているようです。

眞田さん



社会福祉法人としての視点を活かし、高齢者は住み慣れた土地にある懐かしい建物に足を運び、子どもたちは少し遠くからバスで移動してきます。昔にはなかったつながり方ですが、新しいコミュニティの在り方として注目されます。

かねとう子ども食堂

アレルギーの親子にもやさしく向き合うこども食堂

金藤友香理さんは元パン職人。高松でパン屋としても名を馳せ始めた頃に重篤な小麦アレルギーを発症。アナフィラキシーショックで生死をさまようという体験をしたそうです。ご自身の体験からも、日本の伝統食を見直し、食事が身体をつくっているということを大切にしています。ここはこども食堂の中では稀有な、アレルギーのある子にも配慮のできる場所となっています。とはいえ、必ず親御さんとお会いして、お子さんのことをお話しして、コミュニケーションがとれる方だけ、と限定をしています。



夏場にそうめん流しをした時には、米粉のそうめんのレーンと小麦粉のそうめんのレーンを分けて流し、親子で楽しい時間を過ごせたそうです。

あれもこれも食べられない。アレルギーのある子を抱えたお母さんはさまざまな情報に振り回され、自分を責めてみたりといった中で孤立を深めがち。金藤さんはそういった親子の心の拠り所になっているようです。あれもこれもダメ、ではなくこれなら大丈夫と、今日も金藤さんは笑顔で親子を迎え、「食べる」ことの大切さを伝えていきます。



元パン職人であり、カフェもやっている金藤さんは高松市の経済同友会にもつながりがあり、いろいろな食材を寄付していただいています。



みんなの食堂

- 運営主体 社会福祉法人琴平町社会福祉協議会
- 場 所 香川県仲多度郡琴平町榎井 891-1 地域福祉ステーション内
- 連絡先 0877-75-1371
- 主な活動 総合相談事業、生活困窮自立支援、成年後見、居宅介護支援、地域福祉活性化事業（ガリック娘）、買い物支援（まちのキッチン「もぐもぐ」）

しうん子ども食堂

- 運営主体 日新地区社会福祉協議会 / 二番丁地区社会福祉協議会
四番丁地区社会福祉協議会 / 亀阜地区社会福祉協議会
- 場 所 香川県高松市番町 1-5-1 四番丁スクエア
- 連絡先 下記、香川県社会福祉協議会にお問い合わせください。
- 主な活動 毎月第1・3日曜日の 17:00～19:00 こども食堂を開催
（8月は毎週日曜日、冬期は 18:30 まで）

ヌーベルかんざき

- 運営主体 社会福祉法人祐正福祉会
- 場 所 香川県さぬき市寒川町神前字脇 3502-1
- 連絡先 0879-49-1910
- 主な活動 カフェ、デイサービス、わんぱくサポート
【わんぱくサポート】開催日／毎週土曜 9:00～13:00
開催場所／ヌーベルかんざき多目的ホール
対象／小学生まで
利用料金／1回 300 円、送迎、食事付き

詳しくは▶
<http://yu-sho.or.jp>

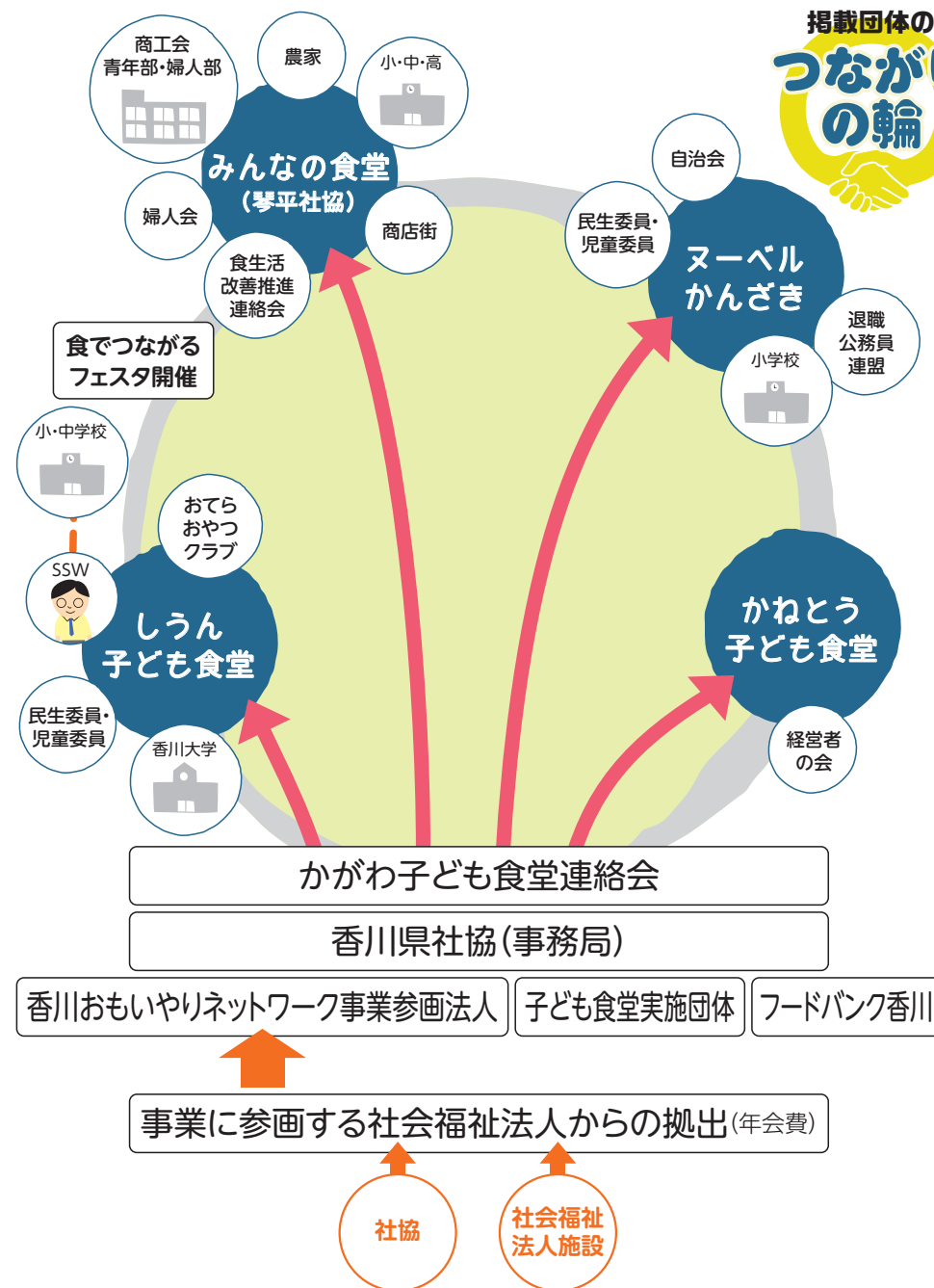
かねとう子ども食堂

- 運営者 金藤友香理
- 場 所 香川県高松市春日町川尻 1055-1
- 連絡先 087-887-2727
- 主な活動 週に 1 回こども食堂を開催

詳しくは▶
<http://kanetou.info/>

社会福祉法人 香川県社会福祉協議会

- 場 所 香川県高松市番町 1-10-35 香川県社会福祉総合センター 5F
- 連絡先 TEL 087-861-0545 (代)
FAX 087-861-2664 (代)





つながりの輪 in 高知

太平洋に臨み、晴天が多く雨が降る時には一気に降る気候が、あっけらかんとした土佐人の気質を育んできたと言われている高知県。

生活保護世帯・児童養護施設・ひとり親家庭の子ども割合や、就学援助率の割合が全国平均より高く、子どもの貧困が深刻な問題になっています。それを解決する取組みが、市民側からも行政側からも始まっています。

楽しく朝食を食べる会 ～鴨田小学校～

「民生委員・児童委員が主体」で実現、小学校で朝食を

早朝7時過ぎ。小学校の家庭科室には白い湯気が立ちこめ、エプロン姿のスタッフのみなさんが楽しそうに準備をしています。そこに三々五々、子どもたちが集まってくると、まずは挨拶をして受付、そして手を洗いま



す。テーブルについてある程度の人数が揃ったら「いただきます」と手を合わせて、月1回のみんなで食べる「朝食」が始まります。

この学校では、朝食を食べていない子どもの割合が高かったそうです。学校はもちろん、地域の人たちもそのことを心配し、なんとかならないものかと1年以上の時間をかけて相談をしてきました。

「『この状況をなんとかしたい。手伝ってくれ』と民生委員・児童委員のメンバーにお願いしました」と、鴨田地区の民生委員児童委員協議会（民児協）会長を務める藤原雅道さん。スタッフの負担も考え、メニューは「ごはんとお味噌汁のみ」に決めました。

「上級生が下級生の面倒を見たり、家で朝食を食べている子どもも参加したりしているのは、子ども同士の親睦が楽しいのでしょう」と藤原さん。「まちで会った時に、子どもに声をかけられたのは嬉しかった」とはスタッフの感想。

「食べていない子どもに朝食を」から始まった活動が、地域ぐるみの顔見知りが増える活動へと広がりを見せています。



代表の藤原さんは、元中学校 PTA 会長、現在は民児協会長など、地域のさまざまな役を歴任されており、地域ネットワークに太い絆をお持ちです。

この民児協の地区内には、鴨田小学校と神田小学校の2つの小学校があり、福祉委員やボランティアの協力を得ながら、両校で楽しく朝食を食べる会を行っています。

前列右から
3人目が
藤原さん

こども広場

365 日、朝ごはんが食べられます

「小学校の校長先生が、夏休みにこども食堂をしてくれる人を探している」と知人から聞いたのは、2016 年夏のこと。「前からどこかでできないかと思ってはいたけれど、そんなに切羽詰まっているなら、うちでやればいいんだ」と思い立ったのは、川上千恵子さん。ホテルなどに朝食を提供する食品会社を運営しており、その工場の一角で始めました。

「わざわざ食事をつくるわけじゃない。業務としてつくるものをちょっと多くするだけ」とは言え、365 日毎朝オープンするのは大変なこと。学校が始まると参加者ゼロの日もありますが、休日は 10 人前後、多い時には 20 人ほど来ることもあるそうです。「子どもが来ないと気分が落ち込む時もありますが、いつでも来られるように 365 日開催にしたので、これでいいんだ」と思うようになったそうです。

最近では、朝ごはんを食べて遊びに出かけ、また休憩に戻って来る子どももいるそうです。「居心地が良くなったのは嬉しいですね。これからは夏休みの宿題や、工作の手伝いなんかを見てあげたいです」と、活動を充実させていこうとしています。



川上さんが 365 日毎朝開催できるのは、食品会社を運営しているからこそ。企業の社会貢献のモデルとして広めたい取り組みです。



水曜校時カフェ

地域の人と大学生ボランティアで運営

「すいようこうじカフェ」と読む、一風変わった名前。「水曜日は小学校が早く終わる日。児童クラブなどに行けない子どもたちが公園にたくさんいて『行く場所がない』というのです。だから、水曜午後の子どもの居場所をつくろうと思った」と言うのは、代表の秦泉寺あやさん。

会場は、地域の人なら誰でも使える「地域交流センター」。学校や公園、スーパーでチラシを配布したところ、活動開始から 1 年を経過した現在、毎回 60 ～ 80 人の参加者、15 人程のスタッフが集まる、賑やかな居場所になりました。食事だけでなく、絵本の読み聞かせ、演劇、宿題、時にはお化け屋敷などもするそうです。

こんなに多様な活動ができるのは、多様なスタッフに、地元の大学生がたくさん参加しているから。授業実習としての定期的な参加も活動を支えています。また、大学生は、子どもたちのお姉さんお兄さんとして「子どもが本音を話すまでの人間関係をつくってくれる」大事な役割も担っています。

「子どもの実態を知ってしまったらやるしかない」と、場所や時間、中高生向けなど対象を変えて、新たに 2 つの活動が始まっています。

「苦しゅうて苦しゅうて、でも楽しい」と、笑顔で話す秦泉寺さん。活動はますます広がっていきそうです。





秦泉寺さん(右)
と大学生
ボランティア
みきさん(左)



水曜校時カフェ代表の秦泉寺さんは元保育士さん。保育園時代の仲間や、地域のネットワークがあることに加えて、大学とうまく連携できているところが、活動を活性化させています。

子どもを中心とした地域の居場所「えいや家」^か

有料老人ホームの一角を借りて居場所づくり

「小学校で授業をする中で、お腹をすかせている子どもが高知にもいることを知りました」と言うのは、子どもが夢を持って生きていけるようにと願って活動している NPO 法人 GIFT の眞鍋大輔さん。

「子どもが自分らしく育つ地域の居場所をつくりたい」とメンバーと共に動き始めたものの、知り合いもなく場所も見つかりませんでした。

そこで、前述の神田小学校での朝食活動の手伝いに行ったことがきっかけで、民児協会長の藤原さんや市社協の職員と出会い、地域貢献を考えていた老人ホームとのマッチングの結果、「えいや家」の活動がスタートしました。

「元気をもらいに」と時折活動場所に顔を見せる入居者や地域の高齢者もいらっしやるとのこと。最近では大学生などの若者も手伝いに来てくれています。

「えいや家」は、「それえいやんか」と子どものやることを応援できる場として、そしてみんなが安心していつでも帰ってこられる「家」のような居場所にしていきたいと名付けられました。



眞鍋さんは、当初地域のネットワークがありませんでした。そこで小学校で行われている朝食の活動を手伝いに行き、地域の方や社協職員と知り合い、そこから場所や資金などの情報を得て、活動の輪を広げてきています。

県が「子ども食堂」を支援

「子ども食堂」は、保護者の孤立感や負担感を軽減する場、地域における見守りの場としての機能が期待されるとして、平成 29 年 4 月より高知県が積極的な支援を行っています。

【柱 1】子ども食堂の検討・立ち上げ段階から活動の継続・充実に向けた支援まで、委託先である県社協と共に幅広く支援しています。

【柱 2】「高知県子ども食堂支援基金」を創設し、県費のほか個人や企業からも寄付を募り、「子ども食堂」の開設や運営に要する経費の助成を行っています。

行政の支援もあり、ますます「子ども食堂」が増えていく勢いを感じる高知県でした。

企業の支援 牛乳 1 パックで 1 円の寄付

食品スーパー「サンシャイン」は、ちょうどサンシャイン牛乳のパックのリニューアルを検討していたところ、「高知県子ども食堂支援基金」が創設されたことを知り、製造元のひまわり乳業と一緒に、「牛乳 1 本に付き 1 円寄付」の取組みを始めました。

牛乳パックには、「えいや家」での様子が印刷されました。



楽しく朝食を食べる会

- 運営主体 鴨田地区民生委員児童委員協議会
- 場 所 鴨田小学校、神田小学校
- 連 絡 先 藤原雅道 090-1177-4770
- 主な活動 鴨田小学校：毎月第4木曜日に朝食を提供
神田小学校：毎月第3木曜日に朝食を提供

こども広場 こども広場 川上食品

- 運営主体 川上食品
- 場 所 高知県高知市南久保 15-38 川上食品 2F
- 連 絡 先 川上千恵子 088-884-7001
- 主な活動 365日 6:30～9:30 こども食堂と子どもの居場所を開催

水曜校時カフェ こども食堂こうち

- 運営主体 こども食堂こうち実行委員会
- 場 所 高知県高知市中万々 2-47 地域交流センター城北 2F
- 連 絡 先 秦泉寺あや 090-3988-4120
- 主な活動 毎週水曜日 16:00～19:00 こども食堂と子どもの居場所を開催
同運営主体が、「常カフェ」「あたごカフェ」「こだかさカフェ」も開催

子どもを中心とした地域の居場所「えいや家」 子どもの居場所 えいや家

- 運営主体 NPO 法人 GIFT
- 場 所 高知県高知市神田 1068-1 有料老人ホーム あっとホーム内 1F
- 連 絡 先 眞鍋大輔 090-6280-5500
- 主な活動 毎週水曜日 16:30～20:00 こども食堂と子どもの居場所を開催

高知県児童家庭課

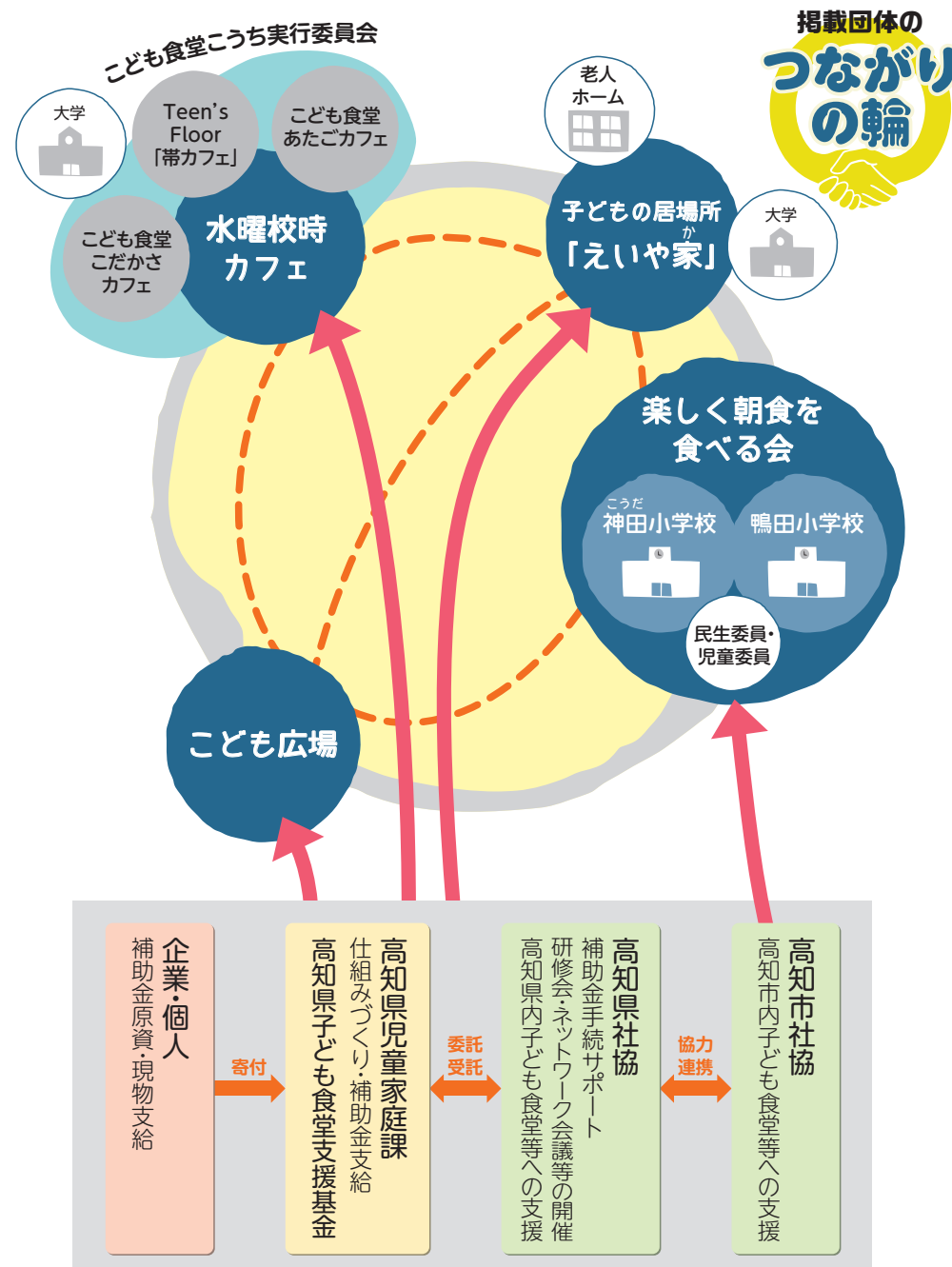
- 場 所 高知県高知市丸ノ内 1-2-20
- 連 絡 先 TEL 088-823-9637

高知県社会福祉協議会・権利擁護センター

- 場 所 高知県高知市朝倉 375-1 県立ふくし交流プラザ 4F
- 連 絡 先 TEL 088-850-7770

高知市社会福祉協議会地域協働課

- 場 所 高知県高知市本町 4-2-40 ニッセイ高知ビル 3F
- 連 絡 先 TEL 088-856-5539





「それやったら、こうしたらええんちゃう？」
課題があっても、個人が親戚のようにつながり、制度の狭間も、ボーダーも丸ごと受け止める人情の町大阪。
制度の有無に関わらず、子どもや大人をとりまくネットワークでつながる力を持つ大阪の西成区、生野区、旭区、東成区の事例を訪ねて来ました。
横やたて、斜めの関係を着々と構築している人のつながりには、これからのヒントがつまっています。

にしなり☆こども食堂

みんなのおかんは今日も笑顔

「こんなとこ出てったる！」という男の子がドアをバタンと閉めます。少しすると説得されて戻ってきて、川辺康子さんが「吉本新喜劇かつちゅうねん」と大笑いしながら迎え入れ、ご飯をみんなで食べる。にしなり☆



こども食堂の日常の光景のようです。

小学校での読み聞かせをきっかけに、この地区の子どもたちの荒れ模様を目にした川辺さんが始めた「にしなり☆こども食堂」。5年目を迎え、たくさんのつながりの中で大人も巻き込みながら着実に成長を遂げ、今日も笑い声が絶えません。

西成区北西部地域では、小学校におけるひとり親家庭がおおむね4割、就学援助率がおおむね7割、生活保護家庭が3割となっています。これらの数字は目安にすぎませんが、孤立などの問題も重複している家庭が数多くあることは想像に難くありません。

周囲の学校と子どもの情報を共有する西成教育サポート6校連絡会やフードバンク関西、ボランティアさんやおおさかパルコープこども食堂フードバンクともつながり、地域ぐるみで垣根のない居場所になってきているようです。川



辺さんは「活動が続ける中で、大阪市社協や子どもを支援するさまざまな団体とつながれたのは大きい」と話します。また、食フェス（44ページ参照）に参加することで、小さな輪から大きな輪へとさらにつながりが広がってきています。

子どもたちとのキャンプや、もちつき大会。さまざまな場面と時間を子どもたちと共に過ごし、最近では市立鶴見橋中学校で月に一度朝食を提供する試みも始めています。塩にぎりや味噌汁を地域の人、先生も手伝って。登校してきた80名近くがあたたかくお腹におさめたそうです。子どもたちの笑顔が好物という西成のおかんは今日も奔走しています。



川辺さんは、長年、小学校の授業の開始前に、絵本や本の読み聞かせをしています。この活動を通して、在校児童全員が川辺さんを知り、「こども食堂においで」と気軽に誘えるつながりをつくっています。

プレーパーク にしなりジャガピーパーク

育くみたいものは「自分のチカラで生きる術」

旧津守小学校、幼稚園の正門に掲げられた手書きの看板には、ジャガピーパークで大切にしていることが書かれています。子どもたちが自分の責任で自由に遊ぶことを通じて、「生きる力」を育むことを目標にしていること、遊びに危険はつきものであること、など。ここは廃校を利用したプレーパークです。西成区の西成特区構想の一環、子育て支援の場として2015年にオープンしました。



現在、西成区から業務委託を受けている「にしなりプレーパークプロジェクト」の事務局長である横田弘美さんは津守小学校の閉校時のPTA会長であり、連合町会の役員でもあり、主任児童委員も務めています。ご自身もお子さんも津守小学校の出身であり、子どもの数が減少していき閉校は仕方のないこととしてもなんとか何かの形で残せないものかと考えられていたところに、西成区事業としてプレーパークの案が浮上しジャガピーパークを開催されています。



横田さんは、小学校閉校時のPTA会長であり、現在連合会町会役員です。ここで築かれた子育て関係者や地域のネットワークは、この活動を進めていく上で欠かせないつながりです。



旧園舎と旧校舎を活用し、遊び場、学び場、たまり場があり、訪れた日は子どもたちがのんびり水遊びをしていました。傍らには菜園もあります。

にしなりジャガピーパークのひとつのプログラムとして「調理実習」を行っています。子どもたちと一緒に調理をしま

すが、自分で調理をすると、キレイな食べ物も残さず食べてしまうそうです。支援だけではなく、自分で食べる技術とチカラを。横田さんたちの願いがこもった「調理実習」です。

地元の人たちに見守られ、今日もジャガピーパークには子どもたちが遊びに来ています。



松野農園

枠や制度を越えて誰もがふらっと立ち寄れる都会の農園



コリアンタウンで有名な生野区は、今も小さな工場がひしめく下町風情が漂う地域です。こんなところに農園が？と小さな驚きとともに訪れた松野農園。NPO法人の「出発(たびだち)のなかまの会」という、知的に障害のある人たちがあたりまえに地域で暮らせるよう、作業所

やグループホームなどを運営している団体が、地域貢献で開いた古民家の一軒家です。農園はそのお庭。訪れた時はイチジクやナスなどを手入れされていました。



ここで不定期に食事会をしているところに、通りがかった子どもたちがご飯を食べに来るようになり、つながりや活動が発展していくことにもなりました。「サラダボウルプログラム」といって、インドネシアやベトナムなどの留学生の人たちと一緒に野菜を育てたり、毎週火曜日にはここでとれたお野菜を使って「ランチ会」も開催。お庭で採れた果物やお野菜を通じて人がつながる。しんどい状態にいる人や、制度の狭間や、つながる機会を持つことができなかった人たちなど、さまざまな人にとっての居場所となっています。まちのど真ん中で土いじりができる、生き物に触れる機会があることの功績は大きく、停学になった高校生の支援であったり、ホームレスの支援であったり。ここで日々起きている何気ないことは「制度の枠

には入りませんやん」と笑う、代表理事の勝井操^{みさお}さん。

また、地域のプラットフォームのような役割も担うようになっているようです。「生野区の空地・空家を利用した食と農のプロジェクトをすすめる会」を2014年によびかけ、30近い団体や個人、行政などがつながり、さまざまな情報交換やマッチングを行っています。空家率が25パーセントに迫ろうとしているこの地域で、新たな活動や人々のつながりが芽吹き始めています。

どんな人でもここに来てひと休みして、時折土いじり。この農園には、人がつながり続ける種が植えられているようです。

勝井さん



お庭を畑として活用することで、国籍も障害も関係なく関わりを持ち、収穫の喜びを得ることを通じてつながりがつくられています。関係者も集いやすく、生野区が抱える「空き家や孤立」といった課題を話し合ったりヒントを得られる場になっています。

「食でつながるフェスタおおさか」の牽引力

2017年11月、「食でつながるフェスタおおさか」が開催されました。全国食支援活動協力会が、世代を超えた「共に食べる参加の場」を広げることが目的に企画し、実行委員会形式で行われました。実行委員には、10以上の団体が名を連ね、これまではなかなか顔を合わせる機会がなかった団体同士のつながりができるという動きがたくさん生まれました。

NPO 法人フェリスモンテの 隅田^{すみだ}耕史^{こうじ}さんのつなげるチカラ

この時、大阪の団体のつなぎ役を担ったのは、NPO 法人フェリスモンテ事務局長の隅田^{すみだ}耕史^{こうじ}さん。NPO 法人フェリスモンテは生野区と旭区で、デイサービスや配食サービスなどを展開しています。旭区では、同じ建物内で誰でも来られるコミュニティカフェと子育て支援の拠点も展開しています。同じ建物内に「おとな食堂」と「こども食堂」があることで、多世代の交流が生まれ、お互いに良い刺激の場になっているようです。

隅田さんたちの「つなげるチカラ」は区を、職業を、年齢を、制度を超えて「こうしたらええんちゃう？」とゆるやかに軽やかに。自分らしく、楽しくつながる動きは要注目です。



実行委員会参加団体の ひとつをご紹介します

母子生活支援施設 東さくら園 ええやん！ ひがしなり 縁パワメントネットワーク ～子どものふみだす一歩を支える！～

無料学習塾「ひだまり」は、母子生活支援施設のアフターケアの一貫として事業展開しています。平成26年4月より地域の公民館を借りて、毎週土曜日の13時～17時の間、東さくら園と中本地区民生委員・児童委員と協働運営で学習支援と居場所支援に取組み今年で5年目を迎えます。

「朝ごはん食べてないねん、昨日はお菓子しか食べてない」と話す子どもたちに、民生委員・児童委員のつくる『らんちたいむ』はお腹と心が満たされる時間となり、学習では大学生ボランティアにしっかりサポートしてもらうなど、ひだまりでの関わりは子どもたちにとって自分の課題や夢に向き合う大きなエネルギーになっています。

また、学習支援にとどまらず、専門職スタッフと民生委員・児童委員の協働で不登校支援や必要な制度や社会資源につなげるなど家族の見えない家庭環境でのSOSもキャッチし、家族丸ごと支援につなげています。

“ひだまりから成長した子どもたちが、誰かに手を差し伸べる側に！” そんな日を楽しみに人情味のあるまちのみなさんと施設とが連携し、これからも縁パワメントなネットワークを広げていってほしいです。



詳しくは▶ <http://kodomo-silyokudou.jp/index.html>詳しくは▶ <https://www.jyagapi-park.com/>詳しくは▶ <http://www.tabidati.jp/>詳しくは▶ <http://www.otasha.jp/index.html>詳しくは▶ <http://www.sakuraen.jp/>



つながりの輪 in 石川

1300年の歴史を持つ北陸随一の古湯、山代温泉。戦後は温泉街として著しい発展を遂げました。バブル崩壊以降は観光客の数が激減し、かつてのにぎわいが薄れる中、旅館の仲居さんなど温泉街で働く女性とその家族を多面的に支え続けている山代ファミリーサポートセンターを訪ねてきました。

山代ファミリーサポートセンター

温泉地に生まれ育つ教え子たちのために

加賀温泉駅から車で10分ほどの、お土産屋や飲食店、スナックが立ち並ぶ賑やかな温泉地。山代ファミリーサポートセンターは、この地に暮らす親子のSOSに寄り添う相談・支援窓口です。旅館の仲居さんなど、住み

込みで昼夜を問わず働くシングルマザーも多く、夜間の子育て支援にも対応します。

「今日はどうだった？」と学校帰りの子どもたちに声をかけるのは、ジャージにサンダル姿がトレードマークの施設長・福田清志さん。活動を始めたきっかけは2006年、中学校の教師として赴任したとき、学校がどうしてもなく荒れていたこと。幼い頃から信頼できる大人との出会いが必要、と気づいた福田さんは、まず自分の家族に相談。温泉街の中心にあった元パチンコ店の空き店舗を借りて、行き場のない親子を受け止める子育て広場と、夜の学童保育を始めました。



「朝がゆの会」を通して、成長を長い目で見守る

2012年から続く「朝がゆの会」は、子どもの朝ごはんを支える活動です。本物を味わってほしいから、お米は釜で炊きます。

授業中も教室に入らず廊下で寝ている男子生徒をつかまえては、叱るより先に、朝がゆの会で薪割りを手伝ってほしいと誘いました。



やんちゃだった彼らもボランティアで大活躍。成人した今では、地域の祭の立派な担い手です。「心配して、信じてやる人がおらんと人は変わらん」と福田さんは言います。

「なんかあったら来い」と言える関係

毎週火・木の朝6時半から始まる朝がゆの会、この日は流しそうめん！うどん、ラーメン、お稲荷さんなど、子どもたちが興味を示すものは、何でもメニューに取り入れます。



待ってましたと、竹筒にいきおいよく流れるそうめんをキャッチ。旬の三つ葉とスダチを添えて。食材の多くは地域の人からの差し入れです。子どもたちのおじいちゃん世代の登校見守り隊の男性も、一緒に食事をするのが日課です。

子どもが1人でもいれば続けるけれど、朝がゆの会の活動はなくなって

もいい、と福田さん。大事なのは、つながった子どもたちに「なんかあったら来いや」と、いつでも言える関係でいることだと教えてくれました。

「ちょっと手伝って」が出番をつくる

山代ファミリーサポートセンターの活動は、対象年齢も内容にも、決まりがありません。赤ちゃんから若者、高齢者まで切れ目のない「まんだら支援」は、参加・包摂型の支援そのもの。福田さんの口癖は「ちょっと手伝ってや」。

ひきこもりがちな若者が石臼で挽いた本格コーヒーは、蓋つきの容器にストックしてお客さん用に。舞台を用意したら踊る子はいっぱいいる、と話す福田さんは、ここに関わる人みんなに出番をつくるのが仕事です。



地域ネットワーク：子どもを育てる会

山代温泉では、山代ファミリーサポートセンターをはじめ、地域のさまざまな人たちがつながりながら、子どもの育ちを支えています。そのひとつが月1回の「子どもを育てる会」です。

主要メンバーは、保育園、小学校、中学校、保護司、スクールソーシャルワーカー、警察補導員、子育てひろば関係者、児童家庭支援センター、まちづくり推進協議会、加賀市子ども育成相談センター、加賀市子育て応援ステーション「かがっこネット」、学童保育。保育園から中学校までその子の成育歴を追いながら、必要な支援につなぐことができます。

気になる子どもとその親について取り上げ、見えてきた課題を検討。ケースに応じて児童家庭支援センターや児童相談所とも連携します。



地域ネットワーク：よりみちハウス

2016年、山代ファミリーサポートセンターから歩いてすぐの一軒家に「よりみちハウス」がオープンしました。放課後に寄り道をするように、宿題をして過ごす場です。

「子どもを育てる会」で、規模の大きい学童保育になじめない子、利用料がハードルで通えない子のニーズが見えました。まちづくり推進協議会を中心に、退職教員や地域住民の協力を得て週に3回開催しています。



山代ファミリーサポートセンターを

学校とのつながり：山代中学校・西上純一校長先生



福田さんは、退職された今も学校によく来られて、気になる子の様子を伝えてくれます。

5年前までは掲示物がすぐはがされ、年間に何十枚もガラスが割れたこともありましたが、ここ最近は表面上は落ち着いているようにみえます。

ですが、SNS や LINE が普及し、生徒が家で一人過ごすことが増え、問題が見えづらくなりました。家庭環境が大変な子も、よく我慢しているなど思うことがあるほどです。

学校は、地域と連携することが必要だと考えていますし、気になることがあれば、声をかけてほしいです。どの先生か迷ったら、まずは生徒指導の先生や教頭先生にあたってみるといいと思います。

山代中学校では、地域の方の会議を隔月で開いてもらっています。学校の雰囲気や授業の様子を見てもらうことにもつながっています。学校と地域の段差をなくし、生徒・教師・地域住民のそれぞれに良い影響があればと取組んでいます。

中間支援団体とのつながり：加賀市社会福祉協議会

山代ファミリーサポートセンターは、公的な支援では切れ目ができてしまいがちな子どもたちの対応をしてくれています。活動初期に、調理器具の購入補助や助成の推薦という形で応援をしてきました。

活動を始める際には、地元の社会福祉協議会にどんな情報があるか、ぜひ尋ねてみてください。役所に話をしに行くときのために、行政の言葉が

応援し支える人たちからのメッセージ

わかる人をつかまえておくことも手かもしれません。私たちも、たえず足を運び、名前と顔を覚えてもらうことを大事にしています。



NPOとのつながり：NPO法人かもママ・河原廣子理事長



福田さんが子育て広場と夜間学童保育を始めた最初の頃に、情報交換をしました。

「かもママ」は、市から子育て広場事業、ファミリーサポート事業、子育て世代包括支援センター開設事業（産後家庭ヘルパー派遣、孫育てサロン）の委託を受け活動しています。信頼を得るのも、一歩ずつ。活動の実績を積み上げていくうちに声がかかり、市とのつながりができました。

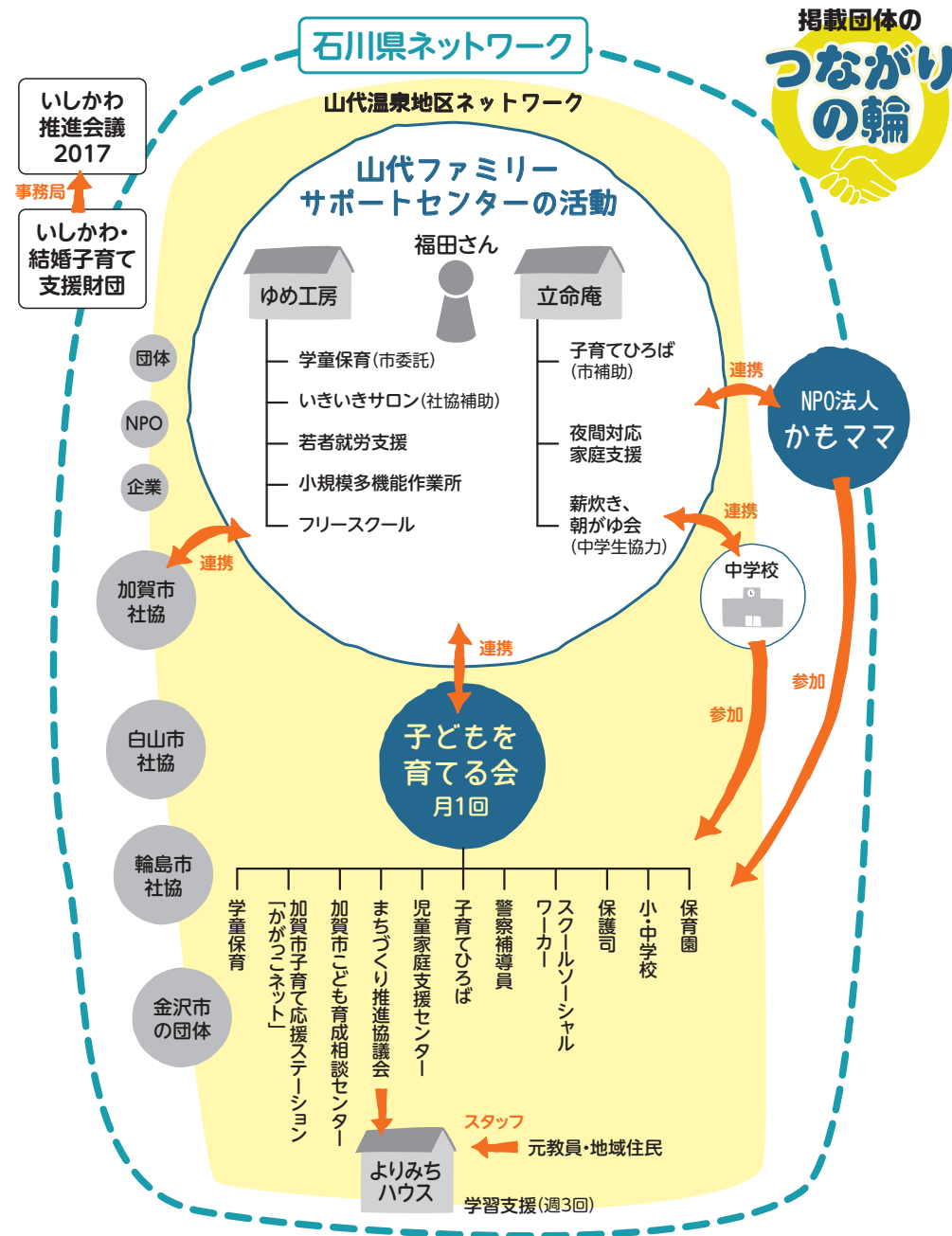
県内の団体とのつながり：「広がれ、こども食堂の輪！いしかわ推進会議」開催

2017年7月11日、石川県内の各地で活躍する子育て支援者数名を中心に3回の準備会を経て、「いしかわ推進会議」が開催されました。当日は各地域の子育て支援関係者等53名が参加し、こども食堂の実践報告も交えて情報交換がされました。この会を通して初めて出会った団体が多く、市町を超えたネットワークの広がりに期待です。

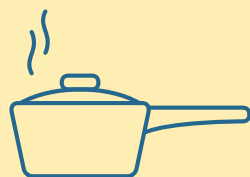
山代ファミリーサポートセンター

- 運営主体 NPO 法人阿羅漢（あらはん）
- 場 所 石川県加賀市山代温泉山背台 1-24-1
- 連絡先 TEL 0761-76-1085
e-mail arahanbb@ybb.ne.jp

- ・子育て支援事業（市補助）
「子育てつどいの広場 すまいる」
平日 10:00 ～ 16:00 @ 「立命庵」
- ・学童保育事業（市委託）
「寺子屋型スーパー学童 ちゃれんじゃー」
平日休日夜間 放課後～ 18:00 @ 「ゆめ工房」
- ・夜間対応家庭支援事業
「夜間学童広場 たそがれハウス」
[夜の子育て支援広場、緊急一時保護、里親（DV）ホーム]
@ 「立命庵」
- ・高齢者支援事業（社協補助）
「いきいきサロン あらはん」
火・木 10:00 ～ 12:00 @ 「ゆめ工房」
- ・ボランティア地域交流事業
「薪炊き、朝がゆの会」
火・木 6:30 ～ @ 「立命庵」
- ・若者就労支援事業
「商人の会」 @ 「ゆめ工房」
- ・小規模多機能作業所事業
「ハン・ディ・サービス 夢工房」 @ 「ゆめ工房」
- ・スーパーフリースクール
あらはん @ 「ゆめ工房」



「こども食堂」が持つ 大きな可能性



天野 秀昭

認定NPO法人プレーパークせたがや理事

こども食堂や遊び場などが、ある子にとって居場所となった場合、その子が抱える問題が見えてくることがあります。仲のいい友達がいらない、学校の話をしたがらない、先生が大嫌い、家に帰りたがらない、家族の話を避ける等々。いじめ、不登校、虐待…。そんな時、それに気づいた大人はどうしたらいいのでしょうか。

その子が抱える困難に対し、周りの大人が直接的にできることは限られて

います。しかし、その子自身がそうした困難に向き合い、超えていく力を身に付けていくことのお手伝いはできます。どうしたらそういう力を育むことができるのでしょうか。

「貧困」という言葉がありますが、これは経済的なことに限った話ではありません。「関係」、「経験」に関しても言えることです。経済的な貧困は、周囲の人が簡単になんとかできる問題ではありませんが、現代の子どもの恐らくほとんどが、「関係」と「経験」の貧困状態に置かれていると考えられます。そして、ここに関してはできることがあるのです。その内容について少し掘り下げてみましょう。

コミュニティが生きており、地域の遊び集団が息づいていた時代は、子どもは親以外の大人や年齢の違う多くの子どもと出会いました。町の商店の人はどの子どもだか知っており、それとなく見守っていたものです。遊ぶことを通じて、年の上の子から下の子に伝承されていた経験もたくさんありました。しかし、今や放課後まで、子どもは1日の大半を大人が決めたことを

冒険遊び場 って？

「自分たちが子どもだったころと全然違う」。子育て真っただ中の一組のご夫妻が感じた疑問をきっかけに、当時欧州で活発に取組まれていた冒険遊び場（プレーパーク）を、親たちの手で実現。1979年の国際児童年の記念事業として東京都世田谷区がそれを採択したことから、日本初の常設の冒険遊び場「羽根木プレーパーク」が誕生した。「自分の責任で自由に遊ぶ」というモットーの元、基本的に禁止事項をつくらず、「やりたい」という子どもの欲求を存分に発揮できる場をめざした。区の事業ながら、開園時にはプレーリーダー（プレーワーカー）を配置し遊ぶ環境づくりを手掛け、運営は地域住民が担うといった、当時としては画期的な手法を採用し、現在に至っている。今日では、わが地域にもほしいと、この取組みは全国に広がっている。



大きな子どもは小さな子どもに「何かしてあげたい」と思うことがある。この日も、遊具をつくってあげたいと工作を始めた。それをじっと見つめる小さな子ども。大きな子どもは小さな子どもから喜ばれ、「おれ、やるじゃん」という思いを抱く。自己肯定感を感じる瞬間。小さな子どもにとってはスーパーヒーローの誕生だ。なりたなお兄さん、お姉さん像を持った子どもは、その子自身がそう育っていく。

するよう余儀なくされました。子どもが会う大人は、教え指導し評価をする縦関係の人にほぼ限られ、隣のおじちゃん、おばちゃんのような、評価を下さない斜めの関係の大人と出会う機会がなくなったのです。また、同級生ばかりが集められているため、多世代でのコミュニケーションをとる力も、伝承する知恵も育まれることはありません。何をする時間かをいつも大人が決めているため、自分で、あるいは自分たちで考え、決めて行うという試行錯誤を伴った経験の機会も奪われてしまいました。その結果、自発的な関係が失われ、何をどうしたらいいのか自分（自分たち）で考えて動くことがまるでわからない状態の子が増えています。

食事をつくる、という経験のない子は、食事づくりのレシピや手順だけでなく、どんな調味料を使うとどんな味になるかという予測もできません。逆に言うと、経験さえ積めば、こんな味のものをつくりたいと思ったら逆算して計画することができます。こうした経験が及ぼす影響は、料理のつくり方だけにとどまりません。さまざまな場面で、応用が利くのです。

ばく自身は遊び場の人間ですが、そこでも料理をします。みんなで何をつくるか考え、そのための買い物をし、具材を切り、ああでもないこうでもないとい味付けをする。「カレー対決」とか言って、子ども同士がいろいろなカレーをつくって味比べをし、人にふるまうこともあります。人に食べてもらい「もう一味だな」などと言われたら、がっかりしながらも次の時には何をどう工夫したらいいか、がぜん考えます。「おいしいね」と言われたら大喜びです。誰かと楽しさを共有し、喜びあえる経験は、関係を強め、自分を肯定的にとらえられる瞬間ともなります。

こども食堂が持つ大きな可能性、それはこの「関係」と「経験」をそこにいるその子が積み上げていかれる可能性が非常に高いことにあります。それは、その子の「生きる力」を育みます。そして、それこそが、本人が抱えた問題を乗り越えさせていく力となるのです。始めはふるまわれていた子どもがふるまい合うようになる、その貴重な機会にあふれた場所、こども食堂は、そんな場所なのだと思います。



子どもは工作が大好きだ。道具・工具は、子どもが自在に使えるよう自由にとれる場所においてある。ここで育つ子の中には、1歳で金づち、2歳でのこぎりを使う子もいる。もちろん、切り傷、擦り傷はつきものだが、痛い思いをするから次回にはさらに気を付けるようになる。小さなケガの積み重ねは、大きなけがから身を守る力を育てることにつながっていく。なので、よく遊びにくる子ほどけがをしない。



中高生たちによる夕食づくり。自分たちでメニューを考え、材料を決め、お金を出し合い買い物に行き、調理する。書けば単純だが、そのプロセス全体が実に興味深い。全然違う意見をどうまとめていくか、買い出しは誰が行くか、調理は誰がするか、そのたびにめめることがしょっちゅうある。けれど、そうしたことを通じてお互いを知り、折り合うことを学び、調理を体得する。しかも、自分で気づかないうちに。

こども食堂を応援してくれる地域資源

地域で頼りになる人は？

地域には、町会・自治会といった地縁組織があったり、学校とのつながりが強い人、住民と行政をつなぐ役割を担っている人などがいます。

○町会・自治会

町会・自治会は、同じ地域に住む人同士が、地縁に基づき自主的に組織している団体です。近年、地域の方々が協力して快適に安全・安心なまちづくりに向けて取り組むことができる存在として、再認識されています。

○PTA

PTAとは「Parent Teacher Association」の略語です。子どもが学校に入学すると、授業参観や懇談会、学校協議会への参加、学校評価、学校行事への協力や講演会などを通して、親として学校教育を理解し、地域でのつながりもできやすくなります。

○民生委員・児童委員（主任児童委員）

地域住民の立場から子育てや介護の悩みを抱える人や、障害のある方・高齢者などが孤立しないよう、住民と行政や専門機関をつなぐパイプ役を務めます。

一部の児童委員は、児童に関することを専門的に担当する「主任児童委員」の指名を受けています。

こども食堂を立ち上げたい時は？

こども食堂に関する講座開催や、個別相談などを行っている中間支援組織や行政窓

口があります。

○社会福祉協議会

P11 参照

○行政の子ども関係の部署

P14 参照

子どもの様子が気になった時は？

子どもの様子が「あれっ」と思った時、相談できる窓口などがあります。

○子ども家庭支援センター

（※自治体によって名称は違います）

子どもと家庭の問題に関する総合相談窓口です。18歳未満の子どもや子育て家庭のあらゆる相談に応じるほか、ショートステイや一時預かりなど在宅サービスの提供やケース援助、サークル支援やボランティア育成等を行っています。

○児童相談所

児童家庭相談に応じる市区町村と連携しつつ、養護や障害、非行などの専門的な知識や技術を要する相談に対応します。児童福祉士（ケースワーカー）、児童心理士、医師などの専門職職員による診断に基づいて援助方針を検討し、援助をします。

○スクールカウンセラー

保護者や教職員、児童生徒に対する相談や研修といった学校内での心理的なサポートをします。

○スクールソーシャルワーカー

P17 参照



こども食堂や子どもの居場所を支え、力になってくれそうな、主な地域資源をご紹介します。こうした先は、さまざまな情報だけでなく、賛同者と出会う可能性のある場でもありますので、訪ねてみることをおすすめします。

子どもや親子で過ごせる場合は？

子どもや子育ての居場所、子どもの遊び場は、その活動を支えている多くの人々に会える場でもあります。

また、社会福祉法人などが取組む地域貢献活動の中には、地域の子どもの対象にした活動もあります。

○地域子育て支援拠点

（※子育てサロン・ひろばなど名称はさまざまです）

0～3歳を中心とした乳幼児とその保護者が、一緒に遊んで過ごせる場所です。

○プレーパーク

「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーにした遊び場です。子どもたちの好奇心を大切に、自由にやりたいことができる遊び場をつくらうというもので、1940年（昭和15年）以降ヨーロッパを中心に広がった遊び場です。

○児童館・児童センター

P13 参照

○社会福祉法人

P27 参照

○母子生活支援施設

P45 参照

食材などの寄付をお願いできる先は？

例として

○フードバンク

「食料銀行」を意味する社会福祉活動です。まだ食べられるのに、さまざまな理

由で処分されてしまう食品を、食べ物に困っている施設や人に届ける活動です。

参考：フードドライブ

家庭で余っている食べ物を学校や職場などに持ち寄りそれらをまとめて地域の福祉団体や施設、フードバンクなどに寄付する活動です。

持ち寄り、まとめる活動がフードドライブ。それらを適切な場所や人に届ける活動がフードバンク、ということになります。

○ライオンズクラブ/ロータリークラブ

世界中に支部がある社会奉仕団体で、さまざまな地域貢献活動を行っています。地域の実業家、医師、弁護士などといった人が会員となっています。

○おてらおやつクラブ

お寺にお供えされる「おそなえ」を、仏さまからの「おさがり」として頂戴し、支援団体の協力の下、子どもやひとり親家庭などへ「おすそわけ」する活動です。

○生協

「生活協同組合」の略で、数ある「協同組合」の一つです。消費者一人ひとりが協同で運営・利用する組織です。地域貢献事業として子育て支援や配食サービスといった暮らしに根ざした活動をしています。

○JA

農業協同組合「Japan Agricultural Cooperatives」の頭文字をとったもので、いわゆる農協です。農業の活性化とともに地域の農業体験や支店を中心とした地域活動に力を入れています。



○おわりに

2016年9月にキックオフした「広がれ、こども食堂の輪！全国ツアー」は実行委員会形式にて始まり、2018年3月までに全国39ヵ所、のべ1万人の方々にご参加いただき、この間にこども食堂への理解と地域での取組みは大きく広がりました。各地のツアー実行委員を対象に2017年秋に行ったアンケート調査では、①子どもの居場所のネットワークづくりが始まっていること、②一部の自治体でこども食堂運営への支援が始まっていること、③食品衛生やアレルギー対応などのリスク管理や、学校や行政との連携に課題があること、④貧困対策イメージの払しょくを求めながら「来て欲しい子に来てもらえていない」ことへの悩み、などが浮かび上がってきました。

こうした現状をふまえ、こども食堂関係者に加えて、児童館、親子ひろば、プレーパーク、民生委員・児童委員、社会福祉協議会、スクールソーシャルワーカー、母子生活支援施設他福祉施設など多様な関係者・関係機関がゆるやかに連携する「広がれ、こども食堂の輪！」推進委員会を開催しています。ここでは、学習会や冊子作成などの活動を通じて、こども食堂支援の継続を模索しています。

今回の冊子は、こうした活動の一貫として作成いたしました。第1弾の『広がれ、こども食堂の輪！活動ガイドブック』（http://www.mow.jp/pdf/3.27_kodomo_2）では、地域毎に行われている多様なこども食堂の活動事例をご紹介しました。続く第2弾となるこの冊子は、地域の多様な機関との連携によるこども食堂の可能

性を願い、編集されています。

最後になりましたが、この冊子は中央共同募金会「赤い羽根福祉基金」より助成をいただき作成・発行することができました。あわせて「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアーの開催にご支援下さいました関係者の皆様、ご参加いただきました皆様に心より謝辞を申し上げます。

「広がれ、こども食堂の輪！」

全国ツアー実行委員会副代表

平野 寛 治



発行

「広がれ、こども食堂の輪！」
全国ツアー実行委員会
テキストプロジェクト

一般社団法人 全国食支援活動協力会内
〒158-0098 東京都世田谷区上用賀 6-19-21
<http://www.mow.jp>

この冊子はプライバシー保護に配慮して作成しております。
本誌掲載記事・写真等の無断転載を禁じます。

2018年3月

社会を良くするたしかな一歩



赤い羽根
福祉基金

この冊子は、赤い羽根福祉基金の助成
により作成しています。